

山本二三丸先生記念号によせて

山本二三丸先生は、昭和十一年三月東京帝国大学経済学部を卒業後、東京貯蓄銀行書記、東亜研究所々員、日本鋼管株式会社調査部等を経て、昭和十七年三月立教大学経済学部講師（兼任）、同二十一年立教大学アメリカ研究所々員になられ、同二十一年四月経済学部助教授、同二十三年四月教授として三十二年間勤務されて、昭和五十三年三月定年退職されました。

その間、先生は学部では最初景気論、後には経済原論、また大学院修士・博士課程では経済学方法論・価値論・恐慌論を担当、講義をされて、経済学部の発展のため、また後進の育成に努力され、内外ともに多難であった戦後日本の私学において、よくその重責を果たされたのでした。また、先生はその御専門の学殖の故に、とくに請われて愛知大学経済学部の発展のためにも御尽力されました。

山本先生の御専攻の分野は、著作目録からも明らかのように、マルクス経済理論の基礎局面である価値論・再生産論・恐慌論であり、その分野について先生がどのように多大の努力をほらわれたかについて、後年になって次のように回顧されています。「わたくしの研究は、まず、価値論、恐慌論および再生産論という、三つの、いわば理論体系部分の正確な把握というところからはじまった。……それと同時に、これらの理論にかんする内外の経済学者の論旨もできるだけ眼を通したが、その大多数のものは、言葉こそマルクスのそれと同じものを並べているとはいえ、その理解はまさにマルクスの反対のものであり、論理的にみても甚だしい混乱を呈したものであった。そこで、わたくし

は、主として右の三つの理論について、マルクスの述べている正しい内容と、これについてさまざまな解釈を下している経済学者の主張とをつきあわせ、真に科学的な理論の意義を明らかにすると同時に、論理的思考を欠いた各種の解釈の誤りと混乱とを明確にするという作業を、しばらくのあいだ、たゆみなくつづけたのである、と。その学的成果は、労作『価値論研究』（青木書店、一九六二）——これは、価値法則 \parallel 等価交換という当時一般的な価値法則に関する理解の全面的・根本的な批判の上に、市場価値の規定について独自の見解を提示され、市場価値と市場価格との関係などが『資本論』に即して説明されている——、『再生産論研究』（同書店、一九五六）——社会的再生産の歴史的形態、それを貫く法則を提示すると同時に、再生産論の「意義と限界」を明らかにした——、『恐慌論研究』（同書店、一九五〇）——再生産論を基軸とする各種の恐慌論をとりあげ、それらに共通している再生産の条件 \parallel 再生産の均衡という解釈を批判し、再生産の条件 \parallel 法則という理解を打ち出した——となつて世に問われるに至つたのでした。こうした学的認識作業はその後も絶えることなく継続されていき、やがて後半生における研究業績の内容を形づくることとなります。すなわち、『資本論』は、資本主義から社会主義への必然的移行 \parallel 発展と、それを担う労働者階級の歴史的使命を明らかにすることを学的課題とするものでしたが、このことはマルクス経済理論を研究する者にとって、『資本論』体系の正確な理解のみならず、さらに資本主義から社会主義への移行 \parallel 発展の展望を明確化するという課題をも負うことを意味しております。したがつて、山本先生の研究は、第一に『資本論』の方法論的基礎、究極の目標、『帝国主義論』への発展の関係、その実践的意義などを全体的関連のもとに説明すること——これはトロッキズム・修正主義・教条主義批判となつて展開された——、第二に資本主義から社会主義への過渡期の理論を検討すること——先生の毛沢東思想への関心は、この点と関連している——、第三に日本資本主義の現状を分析し、そ

の体制変革への展望を示すこと——これはまだ体系だったかたちでは示されていないが、むしろ今後に期待されよう——、に向けられていきました。山本先生の研究の全過程を貫申する究極の課題が「これによって人間経済学を完成させたい」という点におかれていたのは留目すべきことであり、「人間的労働の経済学的考察」(『立教経済学研究』第十四巻四号——第二十九巻四号)は、その理論的礎石となる研究であると見てよいでしょう。こうした学問上の業績によって、先生は昭和二十九年二月、経済学博士の学位を受けられました。

もとよりこの間をつうじて、本学の研究と教育の充実、発展にあたってこられたことは、その門下で育った教多くの大学教員および研究者の養成をみても十分に分るところであり、したがって立教大学は、先生が多年にわたって本学ならびに経済学部の発展に御尽力された御功績に対し、昭和五十三年十一月十五日名誉教授の称号を贈ることに致しました。そして、また私たちは、先生のおくまでも論理の明晰さ・首尾一貫性を追求される峻厳なる学風を偲び、その定年退職の秋にあたり、先生の本学、とくに経済学部への貢献と御指導に対する感謝の気持をあらわすべく、本号をもって先生の業績を記念する特集にあてることにしました。

山本先生は自らの人生の四半世紀以上の歳月を過ごされた立教大学を本年三月に去られることになりましたが、経済学部とともに学部の充実発展のために努力された事實は、先生の率直な御人柄への印象とともに、消し難く本学の歴史に刻みこまれることでしょう。これからも先生がますます御元気で学界、実社会において活躍され、私たちのために御指導下さいますよう御願ひ申し上げます次第です。

昭和五十三年九月

経済学部長

住 谷 一 彦